

佛蘭西書巡覧 36

平山弓月

詩人としての彼の豊かな感受性は、それらの動物の生態を見事に描き分けているのみならず、そうした動物の置かれている社会的な環境一つまり、十七世紀後半のフランスのそれにほかなりません—を、まるで一巻の絵巻でも見るように、目のまえに繰り広げてくれます。

『増補フランス文学案内』



幼い日々、インソップの「寓話」に、教訓めいた文言を理解せずとも親しんだ方は多いことでしょう。しかし、皆さんがお読みなられたのは、インソップそのものではなく、十七世紀の一フランス抒情詩人が、文学性豊かに美しいフランス語に移した詩の和訳ではなかったでしょうか。

この詩人こそが、ジャン・ドゥ・ラ・フォンテーヌ Jean de La Fontaine (1621-1695) その人で、今回は、全12巻240篇余りの『寓話』 *les Fables* (1668-94) を取り上げましょう。

詩人は、パリ東方シャンパーニュ地方の、裕福な家庭に生を受けました。地元でラテン語を学ぶと、神学を修めるべくパリに上りましたが、こと志と異なり、文学に惹かれ神学校を辞め、法律の勉強に向いました、弁護士資格をえたものの、文学を捨てることができず、故郷に戻り創作の日々を送るようになりました。詩人が世に出るきっかけは、妻の縁戚のおかげで、当時権力の絶頂にあった財務卿フーケに、ギリシアの美少年の恋に着想を得た長編詩『アドニス』 Adonis (1658) を献じたことに拠りました。ルイ十四世の勘気を蒙りフーケが失脚すると、詩人は当時の思想家や文筆家と交わり、次々と作品を世に問いました。中でも最も高い評価を得たのが、『寓話』でした。

La Cigale et la Fourmi

蟬と蟻

La Cigale ayant chanté	一夏中
Tout l'été,	歌っていた蟬は
Se trouva fort dépourvue	冬將軍がやってきたとき
Quand la bise fut venue.	無一物とわかりました。

皆さんは「蟻とキリギリス」の名でこの物語を知っておられるでしょう。テーマはインソップに借りたもので、ギリシア詩人のお話では、「蟻とセンチョコガネ」(中務哲郎訳)となっています。「蟻」は変わりませんが、対する動物は、おそらくはそれぞれの風土で最も親しいものに因るものなのでしょう。

Elle alla crier famine	蟬は窮乏を訴えに
Chez la Fourmi sa voisine.	隣人の蟻のところへ行き、

La priant de lui prêter	暮らせるよういくらかの食べ物
Quelque grain pour subsister	貸してくれと頼みました
Juaqu'à la saison nouvelle.	次の季節が来るまで。
Je vous paierai, lui dit-elle,	必ずお返しますから、蟬は蟻に言いました、
Avant l'août, foi d'animal.	次の八月が来る前に、動物の名に懸けて誓います、
Intéret et pricipal.	利息と元本を合わせて。

蟬は必死になって蟻に頼み込みますが、蟻の返事はよくご存じでしょう。

La Fourmis n'est pas prêteuse.	蟻は気前よくはありません。
C'est là son moindre défaut.	蟻の欠点はこんなものではありません。
Que faisiez-vous au temps chaud ?	暑いときあなたは何をしていたの？
Dit-elle à cette emprenteuse.	とこの借り手に言いました。
Nuit et jour à tout venant,	夜も昼も誰にでも
Je chantais, ne vous déplaie.	私は歌っていたのです
Vous chantiez ? J'en suis fort aise.	歌っていたですって？結構なことですね、
Eh bien dansez maintenant.	じゃあ今度はお踊りになりなさい。

インソップさんの方は、最後に次のような教訓を加えます。「このように、ふんだんにある間に将来に備えないものは、時勢が変わればひどい不幸にみまわれるものだ」と。

「少年老い易く、学成り難し」とも言います。古今東西、同様の教えは枚挙に遑がありません。若いころには十分に理解できなかったこの類の教訓は、すでに老境に入っている筆者には、痛いほど心に響きます。と言って、妙に教師風を吹かせて皆さんにこのような古人の教えを繰り返しはしません。皆さんにお願いしたいのは、今はただインソップやラ・フォンテーヌなどの著した書籍を、虚心坦懐に繙いていただきたいのです。

読書は、読む年代によって様々に読み方が異なります。繰り返し幾度も読まれる物だけが、古典として残ってきたのではないのでしょうか。幼いころに親まれた本を今一度取り出し、お読みになられることをお勧めします。改めての発見があるでしょう。読書の「悦び」がそこにあると思います。

ひらやま ゆづき (教授・フランス語・フランス文化論)